

伊奈町生涯学習に関する住民意識調査が示すもの

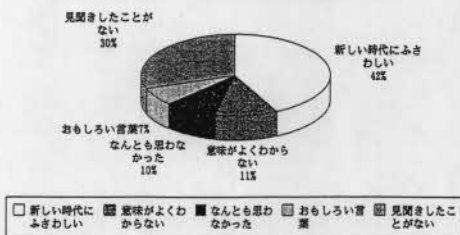
昭和音楽大学短期大学部助教授 西村美東士

1 都市型生涯学習の「新しい風」を呼び込もう

—生涯学習という言葉の周知度について—

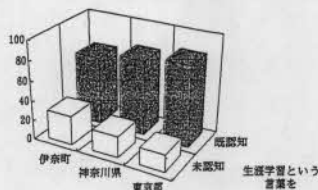
今回の調査によると、「生涯学習という言葉をこれまで見たたり聞いたたりしたことがありますか」という生涯学習という言葉の周知度に関する質問に対して、次のような結果が出ている。

図1. 生涯学習という言葉の認知（無回答を除く）



これを近隣の最近の調査、「東京都における生涯学習の実態調査」（東京都教育委員会、平成5年3月）、「神奈川県生涯学習基本調査報告書」（神奈川県教育委員会、平成4年11月）のそれぞれの関連する項目の調査結果と比較すると、次のとおりである。

図2 生涯学習という言葉の認知度の比較



もちろん、東京都の場合は「あなたは生涯学習という言葉をご存じですか」に対して「よく知っている」「だいたい知っている」「言葉は知っているが、意味は知らない」「まったく知らない」、神奈川県の場合は「あなたは生涯学習という言葉を知っていますか、ありませんか」に対して「聞いたことがある」「聞いたことがない」というように、設問や選択肢の言葉づかいにニュアンスの差があるため単純に比較することはできない。

ただし、生涯学習という言葉を知らないという場合でも、その人の生涯学習活動そのものが全般的に不活発であるということには直接にはつながらない。私たちはそこに十分留意しなければならない。たとえば、神奈川県調査では、いわゆる「おしゃれな街」といわれるような都市部での「生涯学習という言葉を知ったことがない」とする人の割合が必ずしも低くないという結果も出ているが、そうかといって、そういう都市部の住民がいきいきとした生涯学習活動を味わえていないとか、その自治体が生涯学習のまちづくりに失敗しているとはいえないであろう。逆に、高い周知度を誇る周辺部の自治体においても、それが単なる行政側の生涯学習推進スローガンに終わってしまっているだけで、住民自身が「自分のためのすばらしいチャンス」として生涯学習をとらえるような自発的、能動的な生涯学習社会の風土にまでは至っていない場合も考えられるのである。

問題は、生涯学習の周知度の数字そのものにあるのではなく、住民が自分のこととして生涯学習をどれだけ主体的に受けとめられるような形で、行政が効果的な広報・公聴活動を行なっているかというところにある。

産業社会が発達する中で、企画化、同時化、集権化、極大化、専門化、集中化などが極端に進行し、人間性を疎外するようにまでなろうとしている現在、その一方で、人びとの個性化や現代社会の多様化が進んでおり、その個性化・多様化を活かして、市民一人一人が個性的な人生を送る社会、あるいは送ろうとする社会を創り出そうとする「新しい風」が吹き始めている。その「新しい風」のひとつが生涯学習であるといえる。一人一人の個性がのびのびと発揮されるような生涯学習のまちづくりは、人間性を回復するための営みでもある。

その点では、伊奈町は、後で見るように、人びとの心の交流のあたたかさや豊かさという、現代においては誇ってよい町民性をもっている。この伊奈町の間人関係の風土は、個性や多様性にあふれた都市生活者としてのおしゃれな生涯学習が実際に存続するためには、むしろ欠かせない風土であるといえる。人間は一人だけでは幸せには

生きられないからである。都市生活者といえども、それは同様である。伊奈町において「生涯学習という言葉をこれまで見たたり聞いたたりしたことがない」という人がまだ約3割もいるという実態は、けっして軽視すべきことではないが、逆に、その3割の町民を含めて、伊奈町のあたたかい人間関係の風土を生かし、行政主導型ではなく、行政と住民がともに手をとりあって生涯学習を進める可能性にあふれているともいえるのである。

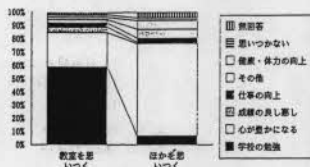
繰り返しになるが、ただ単に生涯学習の周知度を高めるために、行政が声高に生涯学習推進のスローガンを叫べばよいということではない。一人一人の町民としての個性が尊重されるという意味ではおしなべて「都会型」の、町民のあたたかい心の交流という意味では人情味ある「郊外型」の、そういう生涯学習の雰囲気や「新しい風」として伊奈町に呼び込むことが必要なのである。それは伊奈町ならば可能であろう。そのためには、伊奈町の関連行政は、生涯学習の言葉だけでなく、その楽しい雰囲気そのものを住民に伝えるよう努めなければならない。そのことは、首都圏のなかでも、都市型生涯学習の推進行政の望ましい姿を示すパイオニアとしての役割を果たすことにつながるだろう。

2 義務教育の堅苦しい学習イメージの脱皮が必要

ー学習という言葉の受けとめられ方についてー

今回の調査では、「学習という言葉からすぐ思いつくこと」として、「場所」については、「学校の教室」とした人が1位の35.9%で、2位の「県民活動総合センター」を大きく引き離している。また、「どのようなことを想像しますか」については、「心が豊かになる」が53.9%で1位だが、「学校の勉強」とした人が25.7%で他を大きく引き離して2位になっている。そこで、「場所」を「学校の教室」とした人とそれ以外の回答をした人に分けて、「想像すること」の回答の比較をした結果が次である。

図3. 教室イメージの人が想像する生涯学習



さらに、「学校の勉強」と「成績の良し悪し」とした人を「学習＝学校・成績グループ」、「仕事の向上」「心が豊かになる」「健康・体力の向上」とした人を「学習＝向上・心グループ」として、それを「どのような活動だと思います」「学習の成果を何で判断しますか」「あなたは現在、学習することを望んでいますか」のそれぞれの回答とクロスして比較した結果は次のとおりである。

図4. 学習イメージと苦楽の想像

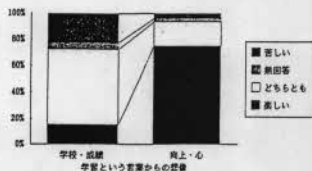


図5 学習のイメージと学習成果判断基準

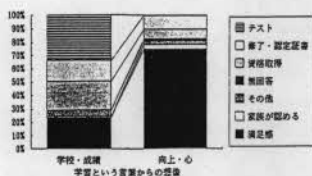
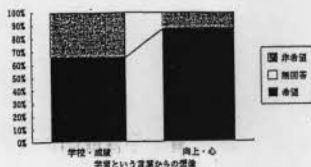


図6 学習のイメージと今後の学習希望



以上のように、学習のイメージが学校の勉強や成績と結びついていることが、生涯学習の阻害要因になっていることが明らかである。この結果は当然のこととはいえ、それにしても両者の差は大きい。ここで注意を要する点は、学校教育が必ずしもすべての人に学習のマイナスイメージを植え付けて生涯学習の阻害要因として働いているということではない。学校教育が生涯学習の基礎づくりとしての役割を十分に果たして、生涯学習の楽しさを味わえている人はたくさんいるのだろう。むしろ、問題は、過去の学校中心主義や成績至上主義によって、学校の教室が堅苦しいところで、学校の勉強が苦しいことであるというイメージをもってしまった人が、とくに、学校卒業後の人生における学習においてもそれを引きずってしまっているということにある。

これを「生涯学習時代の学習格差」と呼ぶことができよう。学校教育の恩恵を大きく受けた人ほど、卒業後の学習も活発に行われるという皮肉な結果が関係する諸調査で明らかになっているのである。これは、生涯学習の推進にあたって非常に重要な問題であり、生涯学習推進にあたってこの問題を見過ごしてしまうならば、本当の意

味での「生涯学習社会」というものはやってこないといえる。

この問題の解決のためには、生涯学習が義務教育の堅苦しい学習イメージから脱皮して、すべての人にとっての「幸福追求」のための楽しい手段としての本領を発揮できるようにすることが期待される。日本国憲法第13条は、「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする」としている。生涯学習が「一部の積極的で勉強好きな人だけのもの」としてではなく、町民のだれにとっても価値のある楽しいこととして受けとめられるように生涯学習のまちづくりを進めていくことは、伊奈町の関連行政にとって非常に重要な課題なのである。

3 町民一人一人の心を重視した生涯学習推進を

一学習の満足感や趣味・生きがいの志向について一

今回の調査で、「学習の成果を何で判断しますか」という質問には、54.6%の人が「満足感」と答えており、これは2位以下の「資格取得」「修了・認定証書」「テスト」のそれぞれの実に4～5倍以上の高率で圧倒的な1位を示している。これらの結果を、「あなたは現在、学習することを望んでいますか」という質問に対して「望んでいる」とした人と「望んでいない」とした人に分けて示すと次のとおりである。

図7 学習成果判断基準と今後の学習希望

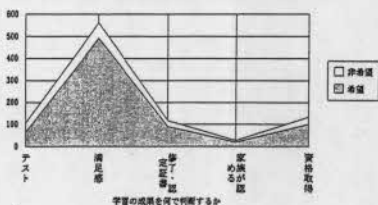
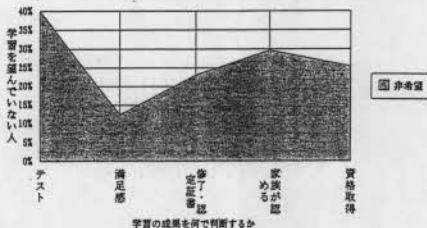


図8 学習成果判断基準ごとの今後の学習非希望率



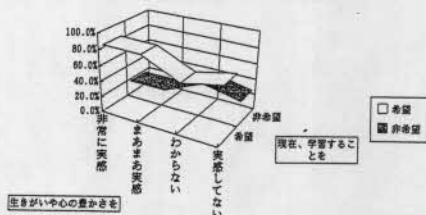
この結果は、学習成果をかなりの町民がまず第一にみずからの心の満足に見出しているということを表わしており、いわば伊奈町民の生涯学習に対する「健全さ」や「潔さ」を示しているものでもあったと考えられる。なぜなら、資格や修了・認定やテストなどの結果も大切ではあるが、それよりもまず、自分がそこでどんな学習プロセスを味わい、自分自身、それをどのように評価しているかを大切にするということこ

そが主体的で自己管理的な学習（Self-Directed Learning）であるための必須条件だからである。

そして、「現在、学習することを望んでいる」と答えた人のうち、11の選択肢から「趣味・生きがいをもつため」を選んだ人（2つ選択）は63.3%にも及んでいる。この調査結果から、満足感や趣味・生きがいを重要視しようとする市民のニーズを尊重し、市民一人一人のこころの満足や充実を重視した生涯学習推進に努める必要があることを強調しておきたい。

なお、「あなたは今、生きがいや心の豊かさを実感していますか」という質問に、「非常にしている」（98人）、「まあまあしている」（682人）、「していない」（165人）、「わからない」（72人）と答えた人が、それぞれどれだけ学習することを望んでいるか、または望んでいないかを示すと、次のとおりである。

図9 現在の充実感と学習意欲



この結果から、現在の充実感と生涯学習への意欲とはある程度の正の相関関係をもっていることがわかる。しかし、「生きがいや心の豊かさを実感していない」という人でも、高い学習意欲をもっていることは、「生きがいや心の豊かさ」を実現する生涯学習への強い期待をむしろ表わすものだととらえる必要がある。いずれにせよ、生涯学習推進は人間の幸福追求を援助するという大きな視野から進められる必要があるといえるのである。

4 伊奈の生涯学習の特徴として「人のつながりのあたたかさ」を大切にする ー生涯学習に関連する団体・グループ・サークルなどの加入率についてー

今回の調査では、「あなたは現在、何らかの団体（グループ・サークル等）で活動していますか」という質問に「している」と答えた人は38.7%にのぼっている。伊奈町では、3人に1人以上が何らかの団体・グループ・サークルなどで活動しているのである。これは、首都圏においてはかなり高率だといえる。加入団体の種類（3つ選択）ごとに、「あなたが今後、団体（グループ・サークル等）活動する上で、最も大事にしたいものは何ですか」の質問に対する回答数を振り分けて示すと次のとおりである。いずれにせよ、「人間関係を大事にしたい」とする人が圧倒的に多いことが注目される。なお、「リーダーシップの発揮」とした人は総数で5人とごく少数だったため、ここでは「その他・無回答」に繰り入れて処理した。

図10 所属団体と大事にしたいこと

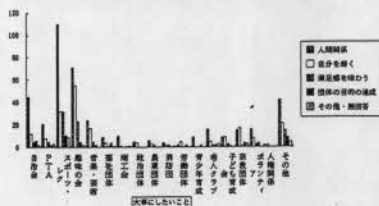
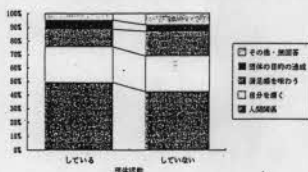


図11 団体所属の有無と大事にしたいこと



このような調査結果からも、伊奈町の生涯学習の特徴は「人のつながりのあたたかさ」であるといえよう。伊奈町の生涯学習推進にあたっては、この「伊奈町らしさ」

を大切にすることが重要である。しかし、それは、団体の維持存続のためには町民の個性化・多様化の傾向を阻害してもよいというようにして個人を疎外するものになってはならない。すでに述べたように、人びとの心の交流のあたたかさや豊かさという町民性を生かしつつ、一人ひとりの個性的な人生を送る社会、あるいは送ろうとする社会を創り出そうとする「新しい風」としての生涯学習につながるようなものでなくてはならない。団体への援助においては、とくに、その点での留意が必要である。

また、今日の多様化、個別化の社会において、団体やグループのリーダーのあり方も大きな変貌を遂げつつある。その主要な変貌の一つがリーダーからメンバーへの「権限（リーダーシップ）の移譲」ともいえる現象である。「〇〇委員会」「〇〇部」などの固定的なブロックの上に恒常的な会長がいて、その会長が全体を統括するという従来の形態だけではなく、ある企画や問題について関心のある数人がその時のグループの中心になってプロジェクト・チームに似た機能を発揮する。そして、会長はいたとしても、強力なリーダーシップをいわば不定期に発揮する者が適宜別に誕生する。しかも、それが必ずしも会長と対立するようなかたちでリーダーシップを発揮するというわけではなく、むしろ会長職としての従来の過度な負担を軽減するという意味で会長自身にも歓迎され、また、組織全体の活性化にもつながっている。さらには、はつきりした会長が存在せず、ネットワーク型で運営される最近の草の根グループの活力も軽視できないものがある。

これらの新しいリーダーシップのシステムは、流動的で柔軟であるがゆえに時代の要請にマッチするものであり、また、人びとが地位や肩書きの束縛から逃れて対等な立場で人間的な交流を深めるという意味では、生涯学習社会の理念にも通ずるものとして評価できるのである。調査では、「団体活動で大事にしたいこと」として「人間関係」が1位、「自分を磨く」が2位になっているが、そう回答した人の心の底には、そういう願いが根づいていると推測してよいであろう。

なお、自治会などの、生涯学習に直接関係することのない団体についても、そのなかで地域の人びとの相互学習や地域づくり活動、ボランティア活動が行われうることを考えれば、生涯学習推進の立場からもけっして軽視してはならない団体であるということを付言しておきたい。

5 生涯学習が生み出す「わが町伊奈」への愛着と誇り

一町民自身の伊奈町の認知度についてー

今回の調査で、「あなたは、伊奈町をよく言われなかったとき、どう思いますか」という質問には、88.7%の人が「大変いや」または「ちょっといや」と回答し、「あなたは、他人から伊奈町のことを聞かれたら、どの程度答えられますか」という質問にも、79.9%の人が「十分答えられる」または「少し答えられる」としている。

そこで、これらを、「生涯学習という言葉の認知度」「学習という言葉の受けとめ方」「学習希望」「団体・グループ・サークルなどでの活動の有無」などとクロスして、「伊奈町をよく言われなかったときでも、何とも思わない」「他人から伊奈町のことを聞かれても、ほとんど、または、まったく答えられない」とする人の結果と比較すると、次のとおりである。

図12 生涯学習の認知（伊奈町をよく言われなかったとき）

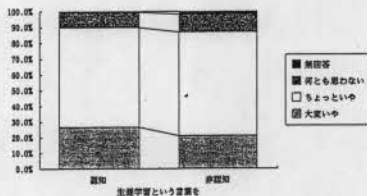


図13 生涯学習の認知と伊奈町の知識

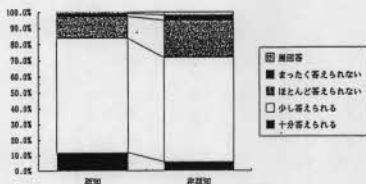


図14 生涯学習のイメージ（伊奈町をよく言われなかったとき）

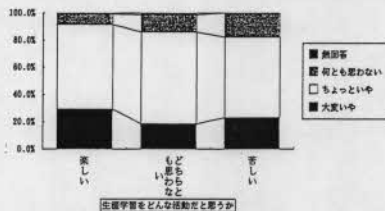


図15 生涯学習のイメージと伊奈町のこと

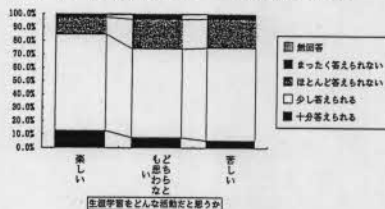


図16 団体活動と伊奈町をよく言われなかったとき

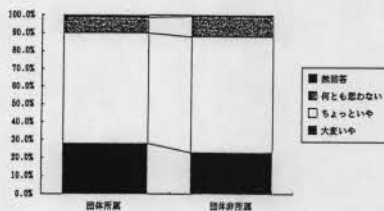
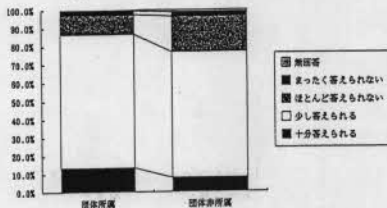


図17 団体活動と伊奈町の知識



また、この問題をコミュニティへの存在意識という視点からとらえるならば、世代によるその意識の違いと、とくに若い世代の意識がどうであるのかを問題にする必要がある。それを示すと次のとおりである。ただし、19歳以下は31人と母数が少なかった。そのため、青年層に特定して、伊奈町の認知度や愛着と、生涯学習への認知度、イメージ、意欲、団体所属との関連を示す際、19歳以下と20歳代をあわせて青年層として処理した。

図18 青年層と伊奈町を

よく言われなかったとき

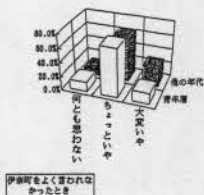
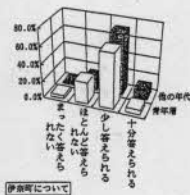


図19 青年層の伊奈町の知識



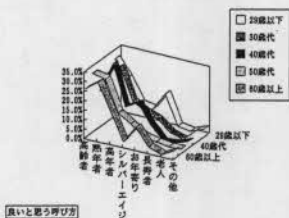
以上の分析から、町民自身の伊奈町の認知度や愛着と、生涯学習への認知度、イメージ、意欲、団体所属とは強い相関関係をもっていることがわかる。生涯学習推進のなかで、行政からの押しつけではない形で、青年層を含めて「わが町伊奈」への愛着と誇りが生み出されるよう配慮することの重要性が指摘できるだろう。

6 いつまでも、どこまでも自分を高めたい生涯学習

一高齢社会に向けた生涯学習志向について

今回の調査で、「あなたは、老後をどのように過ごしたいと思いますか」という質問に対して、半数以上の人々が「趣味や教養を高める」と答えている（2つ選択）。これは、「仕事を続ける」の倍以上の高さであり、ほかの「運動（体を動かす）する」「高齢者の活動に参加する」「ボランティア活動をする」「地域文化の伝承に関わる」「知識や技能を伝える」という生涯学習に関連していると思われるニーズを含めると、圧倒的多数といってよいだろう。つぎに、「65歳以上の方を高齢者又は老人という呼び方をしていますが、今後どのような呼び方が良いと思いますか」という質問への回答として、設問に例示した「高齢者」よりも「熟年者」を選んだ人が多かったことが注目に値する。そこで、どんな呼び方を望ましいと考えているかを年代別に見てみると次のとおりである。

図20 高齢者の望ましい呼び方



上記の様子を見ると、幅広い多くの町民が、高齢社会に向けて、高齢者に対してやさしい眼差しをもって、また、自らのライフプラン設計の課題としても、生涯学習を積極的にとらえていることがわかる。この町民の意向を尊重した上で、高齢期に特有の学習課題をとらえるためには、大きく二つの観点が考えられる。一つは、高齢者として同じ歴史的体験をしてきて、関心や考え方などに共通するものがあるというジェネレーション（世代）の観点、二つは、それぞれの高齢者が年をとること（加齢）によって受ける心身への影響に、共通するものがあるというライフステージ（発達段階）の観点である。

前者のジェネレーションの観点で言えば、戦前に青年期を過ごしてきた人間が現代

を生きていく時の、苦悩、喜びなどを理解し、それを援助するとともに、現代社会が反省しなければいけないことを、今を生きる社会の一員として有効に提起してもらうために必要な学習課題にも、目を配ることが大切である。後者のライフステージの観点については、年をとり、労働から引退したというだけの人と、身体的、精神的、心理的に老衰し、かつ、日常生活行動の上で他人の介護を必要とするようになった人の、双方の立場に対して、適切な生涯学習支援の手が差し伸べられなければならない。

また、そういうきめこまやかな配慮とともに、全町民の半数以上の人が「老後は趣味や教養を高めて過ごしたい」という積極的な希望をもっていると統計的に判断できるという事実を、私たちは真摯に受けとめなければならない。望ましい高齢社会の形成に向けて、いつまでも、どこまでも自分を高めようとする町民の世代を超えた現在の生涯学習ニーズに対して、伊奈町行政としての今まで以上の支援が求められているのだといえよう。

7 仕事との新しい出会いを支援する

一職業に関する知識・技術・態度の学習志向について一

今回の調査では、「あなたが現在（または今後）、職業に関わる学習で、最も関心のあること」という質問に対して、「特になし」とする人は18.9%にすぎなかった。職業に関する知識・技術・態度を高めたいという市民のニーズにどう応えるかということは、伊奈町の生涯学習推進行政にとっても、重要な課題のひとつになるだろう。労働、産業、教育などの関連する諸部局が十分な連携をとりつつ、この課題解決に当たることが望まれる。

なかでも、「就職(再就職)や転職のための知識・技能」と答えた人が、次の「理由」(2つ選択)についてどう答えているかということは重要である。また、「仕事に関係ある知識・技能」と答えた人のなかにも、「管理職についた(つく)ため」「独立をするため」「専門家になるため」「新しい仕事についた(つく)ため」「専門外の仕事についた(つく)ため」(2つ選択)と答える人がある。「理由」については複数選択の質問項目ではあるが、いくつかの視点から延べ実数や比率を表わすと次のとおりである。

図21 「仕事に関係ある知識・技術」と答えた理由

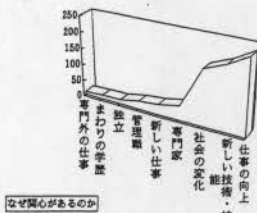


図22 「就職や転職のため」と答えた理由

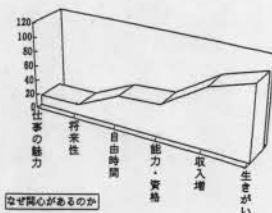


図23 世代に寄る職業学習の理由（実数）

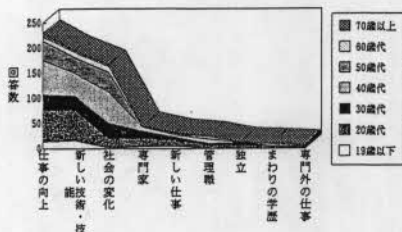
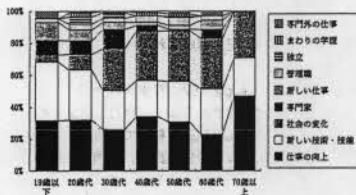


図24 世代に寄る職業学習の理由（比率）



学習において大切なことは、自分の気持ちや考え方の今までの枠組を変えることだととらえられる。新しい仕事との出会いも、本人の人生にとっては重要な生涯学習の一環である。新しい仕事の中で、本人の納得や気づきやより深い自分の発見が行われ、その人の枠組そのものが変化する。つまり、仕事をとおして本人が自分をよりよく変えていくのである。そして、このようにして自分の枠組をつねに自分で変えていくことは、かけがえのない人生を大切に生きることにも通じている。伊奈町の生涯学習の推進においては、地域、家庭、学校のほか、職域においても、町民がかけがえのない人生を過ごす場のひとつとして重視し、その充実のための支援を図る必要がある。

就職、再就職、転職というものは、人生の転機であり、どんな人でも一点の迷いもなく判断することはできないであろう。しかし、職業選択に限らず、人生は選択行為

の連続のプロセスだといえる。自分で自分の人生を選択することから逃げることはできない。自らの責任で判断して自らの行為を選択し、自らの責任において評価する主体性は、現代において非常に重要になっている。そういう主体的な選択を援助する意味で、とくに「仕事との新しい出会い」に関わる生涯学習や関係する情報の収集を、十分、有効に支援することは、伊奈町の生涯学習推進においても重要な課題であるといえよう。

8 生涯学習推進の中でつくる町民と伊奈町行政とのさわやかであたたかな関係

一生涯学習推進施策に関する行政への期待について

今回の調査では、「あなたは、学習活動を行うためには、町に何をしてほしいと思いますか」（3つ選択）という質問に対して、「学習するための施設の整備」と「学習の場（学級・講座）の提供」とする回答がともに1位で、それぞれ57.2%、あとは「学習の相談体制や情報提供の整備」34.5%、「団体（グループ・サークル等）の育成」32.2%、「指導者や援助者の充実」29.9%、「学習資料の充実」20.8%の順となっている。いわゆる学習施設、学習機会、学習情報、団体、指導者と呼ばれる生涯学習支援にあたっての重要な要素を、町民の側も自らよく認識していて、このようにしごく妥当な比率構成になったのだと思われる。

また、たとえば、「指導者や援助者の充実」と答えた人が望む指導者としては、1位の「公的な有資格者」52.1%に接近して「その道の達人」46.0%が2位となっていて、3位の「文化人」33.3%や4位の「大学教授」17.1%を上回っていることなどからも（2つ選択）、活発に主体的に学んでいこうとする町民の健全な生涯学習志向と、そのことによる行政に対する町民としての良識に基づいた姿勢が見てとれる。

とくに生涯学習施設の整備については、町民の学習を支援する行政が果たすべき役割としては、非常に重要な部分である。これを望んでいる人が、実際にはどんな公共施設を想定しているのか（2つ選択）、そして、とくに公民館（生涯学習センター機能）とした多くの人が、それがいない場合にどこで学習するかを他と比較して特徴を示す次のとおりである。

図25 公共施設整備の要望

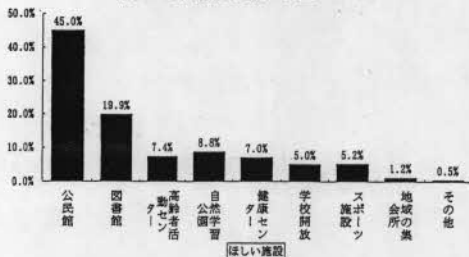
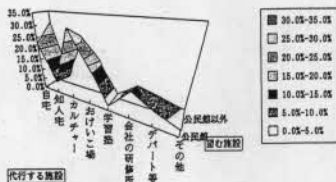


図26 望む種類の公共施設がない場合の学習場所（等高線）



さらに、「あなたは、生涯学習を進めるための施設及び学級・講座の整備が伊奈町になされた場合、学習しますか」という問いに対して、「学習する」と答えた人が60.4%おり、そのうち37.6%の人が「適当な学級・講座がなかった」、35.7%の人が「情報提供が少ない」と答えていることに私たちは注意する必要がある（2つ選択）。すなわち、施設整備は重要であるけれども、それだけでは、生涯学習の現段階での阻害要因（「学習していない理由」）の実際の解決にはつながらないということである。「適当な施設がなかった」とする人は3位の22.9%であり、上位2位とある程度の開きをもっているのである。生涯学習の現段階での阻害要因は複数選択の質問項目ではあるが、これを単純にクロスして、実数と比率で示すと次のとおりである。

図27 学習中断の理由と行政への要望

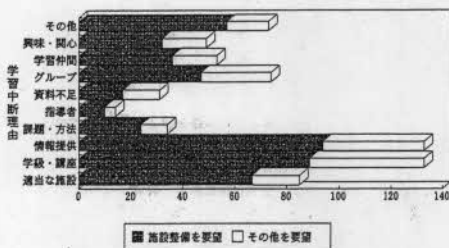
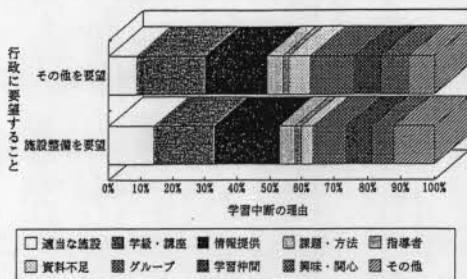


図28 学習中断の理由と行政への要望（比率の比較）



施設というハードな要素だけでなく、機会や情報などのソフトな要素、人やグループなどの人間交流の要素などが重要であり、これらが統合的に整備されないと学習阻害要因は克服できないのであり、それゆえ、前述した「生涯学習時代の学習格差」も広がる危険性をはらんでいるのである。私たちは、町民だれもが自己のより充実した人生や生きがいを求めて生涯学習を行う可能性をもっていることを信頼して生涯学習推進にあたるべきであるが、それは必ずしも一人一人の町民がすでに実際の活動を行なったりしているわけではない。すなわち、潜在化している学習要求も含めて、それを掘り起こして援助する必要があるのである。

なお、「生涯学習を進めるための施設及び学級・講座の整備が伊奈町になされた場合でも学習しない」と答えた人が1割以下ではあるが存在しているが、その「理由」は「自分で行う（個人学習）」が1位で43.8%であり、この個人学習の態度はそれはそれで尊重されるべきである。

つぎに、「あなたは現在、伊奈町が『生涯学習まちづくり推進事業』を始めたことを知っていますか」という質問に対して、「知っている」と答えた人がいまだ23.6%であること、「あなたは、伊奈町が生涯学習推進のためのキャッチフレーズに『学んで 広がる 夢空間』を採用したことを知っていますか」という質問に対して、「知っている」と答えた人が7.0%、「聞いた(見た)ような気がする」をあわせても30.9%にすぎないことをしっかりと受けとめなければならない。

しかし、今回の調査に回答するまではこの事業を知らなかった人を含めて、「生涯

学習まちづくり推進事業」への期待に関しては、「生きがいづくり」42.4%、「伊奈町の発展」41.3%、「高齢化社会への対応」39.0%、「施設の充実」35.1%、「町民の資質の向上」26.1%、「仲間づくり」22.6%、「個性あるまちづくり」22.2%と、それぞれの項目について2割強から4割強の町民が期待を表明しているし（3つ選択）、「『学んで 広がる 夢空間』のキャッチフレーズのイメージについても、「可能性を秘めている」40.7%、「さわやかで夢が広がる」19.3%、「楽しい学習活動」16.4%と、計76.4%、4分の3強の人が共感を表明しているのである。

「学んで 広がる 夢空間」のキャッチフレーズがどれだけ町民の支持を得て、町としてのアイデンティティに資することができるかどうかは、非常に重要である。そこで、この「キャッチフレーズ」と「生涯学習まちづくり推進事業」のそれぞれを「知っている人」「知らない人」に分けて、このキャッチフレーズの支持内容についての構成を示したものが次である。

図29 「学んで広がる夢空間」の認知と指示内容

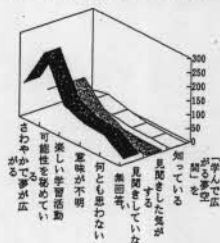


図30 「学んで広がる夢空間」の認知と指示内容（比率）

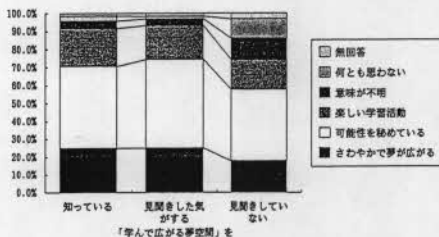


図31 推進事業の認知と「学んで広がる夢空間」の指示内容

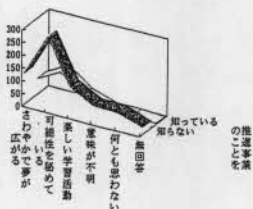
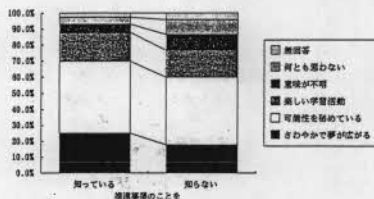


図32 推進事業の認知と「学んで広がる夢空間」の指示内容（比率）



上の結果から、今回の調査を含めて、伊奈町が生涯学習の推進を町民に適切に訴えかけさえすれば、町民からのあたたかい支持のなかで、「生涯学習のまちづくり」を実現することができるのだといえよう。そこでは、伊奈町独特の「人のつながりのあたたかさ」を生かしながら、良識をもった自立した伊奈町民と伊奈町行政とのさわやかな関係が創り出せるであろう。

生涯学習そのものは町民一人一人が自らの自発的意思に基づいて行うものである。しかし、そういう個人にとっての生涯学習が、伊奈町全体にとっての住みよいまちをつくることにもつながっていく。なぜなら、一人で始まった学習がだんだんと生涯学習のムードをつくり、チャンスをつくり、学習仲間をつくりだしていくからである。自分のための生涯学習が、生涯学習のまちづくりにつながるのである。これを実現するためには、生涯学習の主体としての町民と、援助者としての伊奈町行政や関係機関・組織が、ともに主体性を発揮し、それぞれの役割に積極的に関わる必要がある。行

政も、町民も、それぞれのなすべきことを、「ほかの人にやらせてもらうこと」ではなく「自分のやること」としてとらえてほしい。

今回の調査結果を分析してみて、伊奈町の生涯学習に関する現段階の特徴としては、「ともに学ぶ支持的な風土」という町民のあたたかい精神的基盤と、「現代社会に生きる市民としての多様な学習ニーズの高まり」という時代的背景の二つが大きいと考えられる。その二つの条件が整い、機が熟し、町のいたるところで生涯学習として開花する瞬間をともに待ち構えているのが、今日の伊奈町の状況であるといってもけっして言い過ぎではないだろう。